

持続的な森林利用に向けた住民参加型プログラム形成過程と外部支援者の役割

—インドネシア・ボゴール行政区チブラオ集落の住民農業グループの視点から—

吉永 由美佳

キーワード：持続的な森林利用，住民協働森林管理，第三者支援，インドネシア

1. 背景と目的

商業用森林資源の利用量増加に伴い，森林伐採が世界各国で深刻な問題になったことから，人と森林の関わり方が再考されている．インドネシアでは住民協働森林管理制度が導入され，貧困削減と森林保全を目的に生産林における住民主体の持続可能な森林利用プログラムが実施されている．先行研究では，住民協働森林管理制度の効果や制度の限界が指摘された一方で，森林利用プログラム実施主体がもつ運営上の課題と支援者が果たすべき役割については明確にされなかった．本研究ではこれまで注目されてこなかった森林利用プログラムの実施過程に着目し，実施主体が抱えるプログラム運営上の課題・原因の明確化，支援機関の役割の提示を目的とする．

2. 研究対象地と手法

研究対象地はインドネシア・西ジャワ州ボゴール行政区チサルア郡の茶畑農園内にあるチブラオ集落とする．対象地の森林は経済発展に伴い，不法伐採が問題となっていることから，住民組織によって(1)コーヒー栽培，(2)非舗装林道を活かした自転車競技場コース運営，の2つの森林利用プログラムが実施されている．2015年10月～2016年1月及び2016年9月に，林業公社ボゴール営林署，チパユン担当区フィールド・ファシリテーター，ボゴール農業大学，住民組織に対して構造化面接調査を，チブラオ集落内に居住する72世帯中ランダムに抽出した40世帯（住民組織参加9世帯と不参加31世帯）に対して訪問面接形式でアンケート調査を実施し，森林利用プログラムの発展過程を精査した．調査から，森林利用プログラム形成段階，森林利用プログラム開始早期段階，成熟段階の各段階で生じた課題，住民の認識変化，第三者支援の必要性が生じた過程を明らかにし，貧困削減，森林保全，住民参加，第三者支援の4点から，森林資源管理制度の導入目標の達成状況を考察した．そのうえで住民の目線からステークホルダーがもつ役割の重要性について明確にし，持続的な住民参加型森林管理に必要なステークホルダー間の関係性と役割の評価を行った．

3. 結果と考察

森林利用プログラムの形成段階から成熟段階までの各段階における課題と住民の認識を調査したことで，これまで明確にされてこなかった住民参加の課題と第三者支援の重要性が明確になった．まず，森林利用プログラムは集落内の収入格差を是正する役割を担い貧困対策として有効に機能していた．直接的な利益分配が不要な機関から支援を受けるうち，パートナーのような信頼関係を構築できたことが住民組織の活動意欲を高め，収入が得られるプログラムへの改善に繋がったと考えられる．プログラムは森林伐採抑制には寄与したが，一方で生態面での森林保全としての役割について課題が残った．また，集落での人間関係・立場と住民組織結成時・常時の情報提供不足が原因で住民参加に課題がみられた．不参加住民から森林利用プログラムの重要性への理解が得られない場合，新たな参加者取得が困難なうえ集落内での対立を招く可能性があり，持続的な森林管理を阻害する要因になりうる．したがって，森林管理の主体ではない住民もステークホルダーとして考慮すべきである．現状改善のためには，支援機関が不参加住民への情報提供・意見交換会を実施する，政府機関が森林利用プログラム実施地での定期的な情報公開を義務付ける等の対応が効果的と考えられる．さらに第三者支援の重要性を認識すべきである．政府機関・研究機関等が連携して多様な森林利用プログラムの事例研究から得られた情報をデータベース化し，密接に情報共有できるような仕組みを構築することが第三者支援を取り入れるために効果的だと考えられる．住民組織に困難が生じた際には諸機関が迅速に対応可能であり，地域への貢献に繋がると期待できる．